

小学生児童の音韻認識から短い文の読みの指導まで

The Steps from Phonological Awareness to Literacy Instruction for Young Learners

樫本 洋子

(Global Kids 英語教室)

1. はじめに

筆者の主宰する児童英語教室は、大阪府の東に位置する中規模の市内にあり、約 20 年間にわたり 4 技能を総合的に扱い、英語の運用能力を育てることをめざして、小学生から中学 3 年生までを対象に指導を行っている。

2011年度から小学校で5～6年生を対象に外国語活動が必修化され、文科省は2013年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。これにより、次の学習指導要領の改訂では、5～6年生で英語が教科として全国の小学校で教えられることがほぼ決まったとの認識が広まっている。

従来「コミュニケーション能力の素地の育成」を掲げ、「外国語を初めて学習することを踏まえ、児童に過度の負担をかけないために、『外国語を聞いたり、話したりすること』を主な活動内容に設定する」(文科省 小学校学習指導要領解説 2008)として、音声中心に進められてきた外国語活動でも、今後は「読み・書き」についても避けては通れない状況になっている。また中学校とのスムーズ且つ効率のよい連携を目指す点においても、児童期のリタラシー指導は必須であると考える。

そこで本稿では、児童期における効果的なリタラシー指導、なかんずく多読指導への道筋の一例となることを願い、「聞く」・「読む」技能の育成において当教室で実践している小学生児童の音韻認識から短い文の読みへの指導を、低学年から高学年へ段階を追って紹介したい。

2. 自宅教室での文字指導について

民間の児童英語教室である筆者の教室の児童は、地元の市立小学校に通っており、特に英語教育について熱心な家庭環境にある子どもは少ない。週に 1 回、1 時間程度のレッスン時間以外には、筆者の提供する宿題等で英語に触れるだけで(高学年の児童については小学校で外国語活動を年間 35 時間程度受けている)、日常生活の中で十分な英語のインプットを得ているとは言えない。しかし第二言語習得において十分なインプットが必要であることは定説であり、日本のような EFL (English as a Foreign Language) 環境にあつて、いかにインプットの量を確保するかは大きな課題である。そこで、筆者の教室では良質な英語のインプットを少しでも増やすために、試行錯誤の末、2005 年頃から毎回のレッスン

時間内で 15 分程度のリーディング指導を導入している。実際の指導の概要は、以下のホームページ記載のピラミッドと類似しているため、援用したい（図 1）。

ただし、このピラミッドは英語圏に住む子どもたちのために作られたものであるため、EFL 環境にある日本人児童の年齢にそのまま適用することはできない。このピラミッドの 2 段階ごと（3-4yrs~Pre-K / Kindergarten~First / Second~Third）の観点が、それぞれ当教室の低学年・中学年・高学年に相当している。

Reading Skills Pyramid

by Time4Learning.com

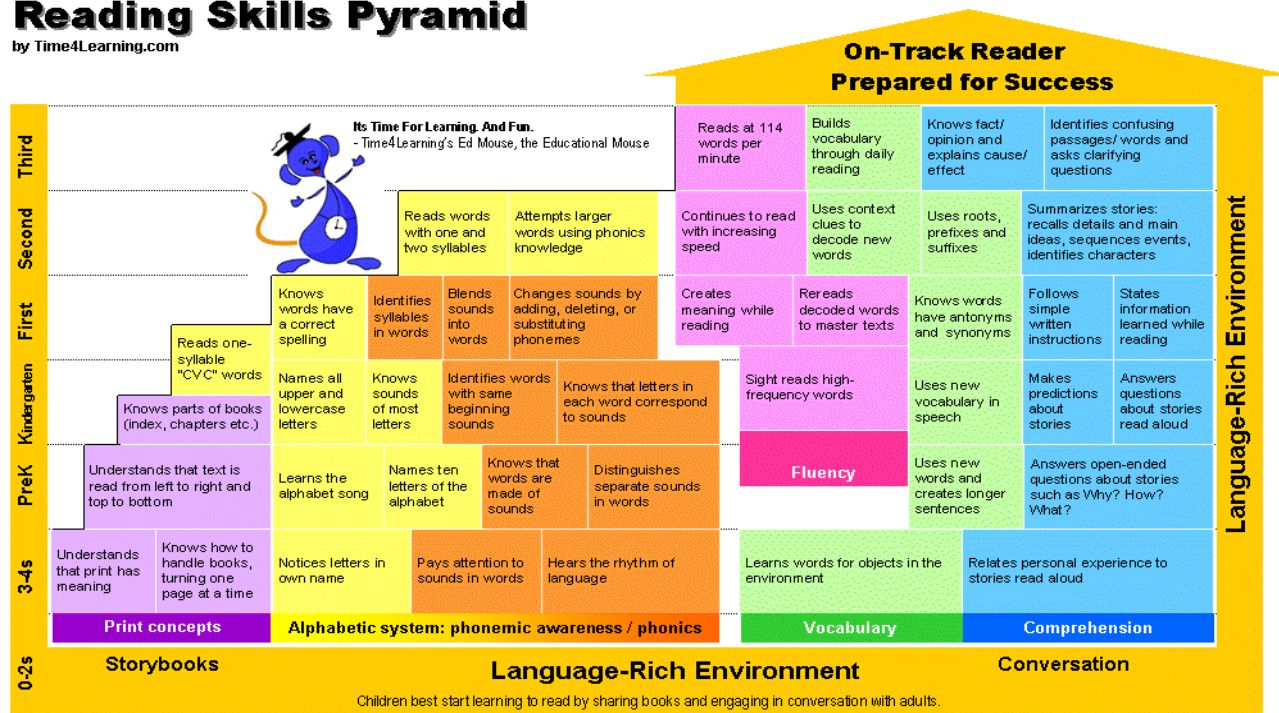


図 1 Reading Skills Pyramid (Time 4 Learning より)

まず幼児・低学年では、五感を使って遊びながら、大文字・小文字に十分親しませ、フォネミック・アウェアネスの力を育て、読みへの準備を始める。中学年になると、フォノロジカル・アウェアネスを養う活動やフォニックスルールの基礎とともに、サイトワードに親しむ活動を取り入れる。またこの時期から絵本の貸し出しを始め、自宅でも音声と文字に触れる機会を増やしている。またトレース&コピーを中心に、ライティングの準備として英語野に慣れ親しむ。そして高学年になると、「レッスン内多聴・多読」を始め、3行日記を書くことにも取り組んでいる。次項から、各段階の具体的な指導方法を示す。

3. 低学年のリーディング指導

文字はいきなり読めるようになるのではなく、発達の段階を経て徐々に獲得していくスキルの一つである。習得には大きな個人差があるとともに、言語によっても習得の困難さが異なる。特に英語と日本語では、言語間の距離が遠く（米商務省機関 外務職員局 FSI:

Foreign Service Institute, Language Learning Difficulty for English)、日本人にとって英語は(習得が)難しい言語のひとつだと言われている(白井、2008)。

英語はモーラ言語である日本語と違い、言語の最小の単位が音素であることに加え、文字と音の対応規則が不規則である。そのため、日本人学習者にとってはまず英語の音韻認識を養う訓練が、聞きとりや正しい音を再生するために有効である。ここで注意したいことは、日本で「音韻認識」というときには、「音素認識(phonemic awareness)」と「音韻認識(phonological awareness)」の2つをほぼ同義として使用しているようだが、厳密には phonemic awareness のほうが狭義、すなわち語の中の一つ一つの音素にフォーカスするのに対し、phonological awareness では、より広い意味で、音素のみならず、シラブル、オンセット-ライム、ライミングさらにはアリタレーションやイントネーションまでを扱う。

音韻認識では、まず文の分解(sentence segmenting)、つまり一連の音を文章の意味の区切りで区切ることができる段階を経て、音節分解・混成(syllable segmenting and blending)ができるようになり、音節がわかるようになる。英語の読みの基本になるオンセット-ライムの操作はさらにその上の段階で、ここでライム(rhyming)や、アリタレーション(alliteration)活動を行い、ようやく音素(phoneme)操作の習得にたどり着くと言われている(学び支援の会ホームページ参照)。

筆者の教室では、低学年期は、以下のようなアクティビティを組み合わせ、音素認識を養う活動を十分に行う。

1) アルファベット

数種の Alphabet Song を歌いながら、一つ一つの文字が名前と音を持っていることを知り、その一つ一つを認識できるように、聞こえてくる音や色分けした文字に従って拍手したり、立ったり座ったり、体を使ったアクティビティを行う。

活動例 : Clap on (red) letters

用意するもの : アルファベットチャート・CD

目的 : ひとつひとつの文字を目にしながら、繰り返し音を聞き、同時に発話する。

手順 : 色分けされたチャートの文字を見ながら、指定された色の文字の所で

Clapping しながらアルファベットソングを歌う(文字名に慣れたら、音で。スタートを A 以外の文字で始めたり、Z からバックワードで歌ったりして負荷を少しずつあげ、飽きさせない工夫をして繰り返し歌う)。

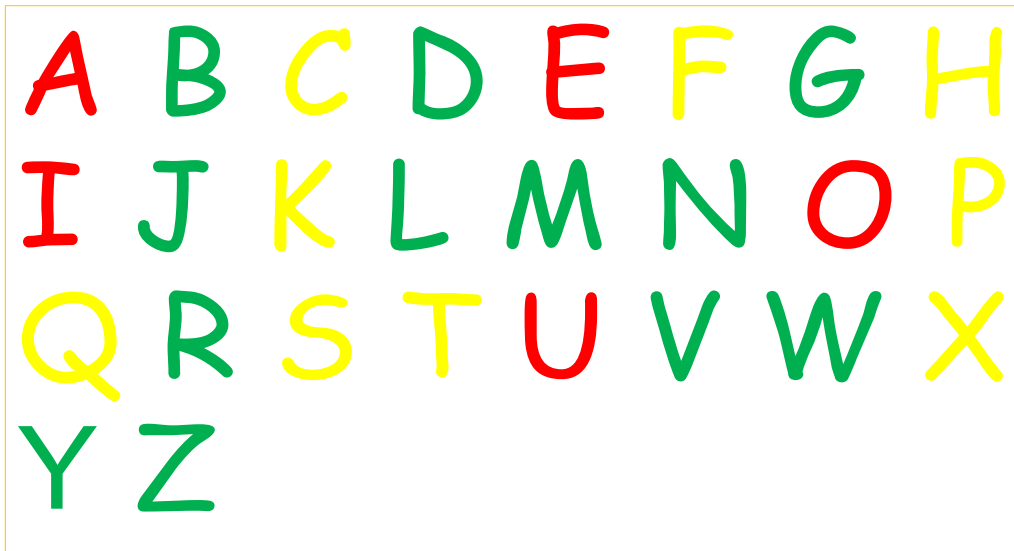


図 2 母音（赤）、有声音（緑）、無声音（黄）で色分けしたチャート（例）

2) 音韻認識活動

アルファベットカードを使用して、Listen and Touch / Hands up / カルタ / Concentrations（マッチングゲーム）/ Listen and Place the cards in order / BINGO / UNO 等のゲームをしながら、A から Z の順番ではなく、アランダムに示されるアルファベットの文字と音を即座に認識する訓練を行う。

アルファベットカードは数種類用意し（大文字・小文字（別々／併記）、イラスト数種、罫線有／無、スポンジ製、サンドペーパー製、マグネット等）、視覚・聴覚・体感覚等を様々な使ったアクティビティを行いながら（例えば個人またはペアで、体を使って文字を作ったものをあてっこしたり、目隠ししてスポンジ／サンドペーパー製の文字を触り、当てるなど）、まずアルファベットの文字に慣れ親しませる。また Phonics Karuta 等で頭字と頭音を結び付ける活動を行う。

大文字は比較的身の回りで目にする事も多いが、実際に「読む」際には小文字の使用が高いため、当教室では小文字により重点をおいた活動を多く取り入れている。

活動例 1 : Phonics Karuta

用意するもの：アルファベットカード

目的：アルファベットの文字と音を結び付ける。

手順：「場」にカードを広げ、指導者の発する initial sound を聞いて、その

正しい文字カードを素早くとる。たくさんのカードを取ったものが勝ち。



図3 様々なアルファベットカード

活動例 2 : Alphabet Domino

用意するもの：アルファベットドミノカード（市販品）

目的：イラストの単語の initial sound / rhyming が同じ絵を合わせる。

手順：人に5枚程度のカードを配り、例えば rhyming の場合は、rat-cat-mat-bat …といったように、順番に音を合わせていく。手持ちのカードをすべて場に出した人が勝ち。



図4 Rhyming Words Dominoes (TREND社)

また頭韻や真ん中の音を聞き分けたり、入れ替える活動を行う。

活動例 3 :

① One finger, Two fingers

用意するもの：ホワイトボードまたはポスター

目的：Initial / Middle Sounds の聞き分け。

手順：教師の示す音を聞いて、聞こえた方の単語の番号に手を挙げる。

T: I'll say a word.

Listen to the words and show me your one finger for number one or two fingers for number two.

Ready? (Pen, /p/ /e/ /n/ , pen). Number 1? Number 2?

①	②
pen	pin
mop	map
bug	bag

図 5 板書例

② Monkey Talk

用意するもの：CD、絵カードまたはポスター

目的：頭音の入れ替えに慣れ親しむ。

手順：頭韻を変えた単語を聞いて、示された絵から元の単語を当てる。

T: Monkey says (Mapple), you say.... Ss: (Apple)!!

3) 絵本の読み聞かせ

毎回の授業では、目標の言語材料や季節にあった絵本を適宜選択して読み聞かせを行う。まとまった英語のお話を聴き続ける訓練をしつつ、絵本の世界を十分楽しめるように工夫をする。あるいはイラストやストーリーを通して異文化理解にもつなげる。

子どもたちは毎回の読み聞かせの時間を楽しみにしている。音と意味がつながり、フォームにも気づかせるような工夫が指導者の側には必要であるが、本稿では割愛する。

4. 中学年のリーディング指導

中学年では、音韻認識と長母音、二重母音、magic E、polite vowel などのフォニックスルールの基礎を学ぶと同時に、一人読みには欠かせない sight word を簡単な絵本 (“Scholastic Sight Word Readers”) を使って 30~50 語程度導入する。授業でこれらの絵本 (全 25 冊) を一緒に音読し、時には本文を各自ノートに書き写させ、イラストの助けなし

に読めるように練習する。これは音の記憶から「読めた気」になっている児童に、文字情報だけで音を再生し、意味理解ができるようにすることと、英語界に慣れ、高学年で実施する3行日記を書くための準備にもなっている。

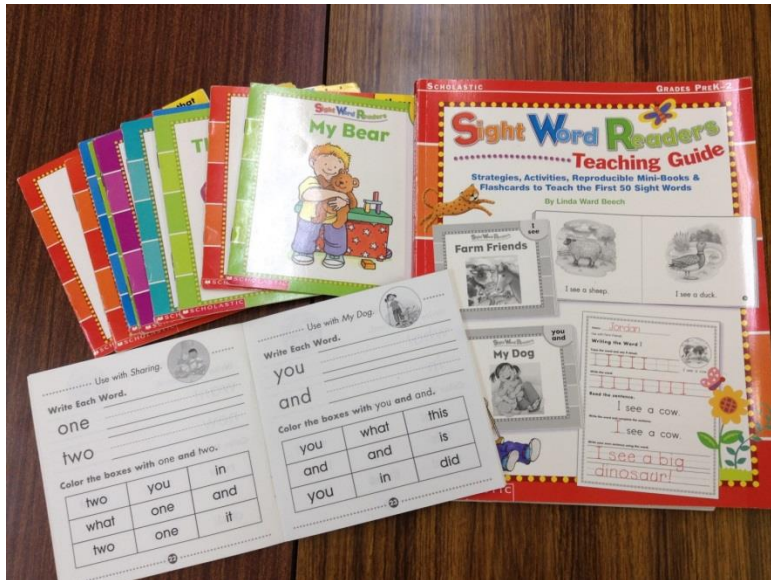


図6 Scholastic Sight Word Readers

また、以下のような活動で、より高次の音韻認識の力を養う。

活動例 : I Spy, You Spy

用意するもの : ホワイトボードまたはポスター

目的 : 簡単な音の足し算をしながら音節を理解する。

手順 : ① いくつかのオンセット-ライムのセットを示し、音遊びをする。

② ペアになってチャンツにのせて、各自がセットの中のひとつの語を言い、何回同じものを言えるかを楽しむ。

T : I spy (-at), 1-2-3!

Ss: I spy, You spy, (-at, -at, -at)! 1-2-3... (???) !!

--- Oh, no! / We did it!!

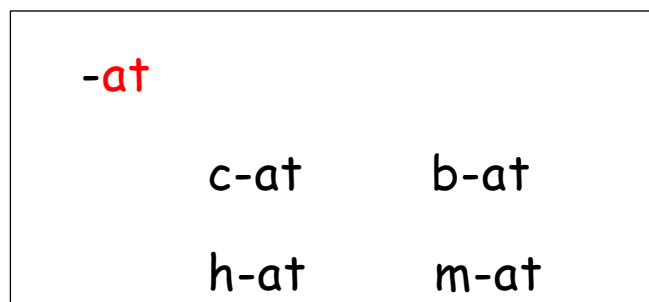


図7 板書例

また、授業内では読み聞かせだけでなく、Oxford Reading Tree (ORT) シリーズなどを中心に、コーラル・リーディング（全員でそろって読む）、シェアード・リーディング（ところどころで児童も読みに参加する）を行い、「自ら読む」体験を増やしていく。音源付きの様々なタイプの絵本の貸し出しもスタートする。多読手帳の記入も開始する。

5. 高学年のリーディング指導

高学年では、絵本の貸出しと授業内多読の時間を中心に実施している。貸出し図書については、毎回レッスンの始めにブックトーク（それぞれ持ち帰った本の感想を日本語で紹介する）を行う。児童間で「感想」をシェアしあうことで、初めは消極的だった児童も徐々に「読書の楽しさ」を感じ、自分自身の好みや興味にあった本を自主的に選ぶようになっていく。

当教室には現在、名作絵本、graded readers、leveled readers、児童書など、YL0～2の本を中心に、2,500冊以上のタイトルを所蔵している。児童の人気はノンフィクションよりもフィクションである。

授業内リーディングは、毎回10～20分を確保する。ひとりに一台コンパクトCDプレーヤーを用意し、子どもたちが自分で操作しながら Listen& Read を行う。指導者である筆者はそれぞれの音読を横で聞いて、内容理解が不十分なまま読み進めていないかどうか（あいまいな発音、飛ばし読み等をしていないかどうか）をチェックしたり、内容について時々簡単な質問をして理解できているかどうかを見極めながら、各自に適切なレベル、興味・関心にあった本を勧めている。もし児童が現在のレベルに合わない本を読んでいると判断した時には、YLを1～2段階下げて読ませる。その後（数週～数か月後）に再度同じ本を読ませてみることで、児童自身が「いつの間にか、スラスラ読めるようになった！」と実感を口にしている。

6. 成果と課題

低学年から教室に在籍する児童については、中学校卒業までにそれぞれのペースで読み進み、最低でも ORT stage 9、トータルで10万語以上を読破している（ただし、小学生は語数よりも冊数カウントを基本としており、まず100冊読破を目指すので、正確な語数は出ていない）。

以上のような段階を踏んで、3年以上多聴・多読を続けた児童は、初見のまとまった分量の文章を前にしても臆することなく、前後の流れから見出しの語彙の意味を推測し、大意をつかみ取る力を養い、「読む」ことへの壁は多読・多聴実施前より低くなっている。小学生時代からリーディング指導を続けてきた多くの児童から「中学校での長文読解にも自信をもって取り組んでいる」と報告を受けている。

筆者が児童期のリタラシー指導で留意していることを以下にまとめる。

①文字の導入は、必ず「音声とセットで」行う。

…音声から文字の順を守り、流暢な読みに重要な英語の音やリズム等を身につけられるよう工夫する。

②リーディングは個人差が大きい。

…低学年から「読み・書き」が好き・得意な子もいれば、高学年になっても、「読み・書き」が嫌い・苦手な子どももいる。

③児童は覚えるのが早い、けれども忘れるのも早い。

…繰り返し、根気よく行う必要がある。またいろいろな認知の特性・学習スタイルを考慮して、導入・定着のためのアクティビティは、V (visual)・A (auditory)・K (kinesthetic)のバランスに十分配慮する。

子どもたちの「読むことへの壁」を低くし、「読む」習慣をつけることが第一の関門でもある。そのために、何より子どもたちが「読書は楽しい！」と実感するように、各自のペース、段階に沿った指導をすることが、リーディング指導成功の秘訣であると考えている。その意味で、一見集団指導をしているようであっても、中身は子どもたち一人一人が自らの成長を実感できるような個別指導として、きめ細かいリーディング指導をデザインするよう心掛けている。

7. 今後の課題と展望

小学校で外国語（英語）が教科化されれば、小学校から高等学校までの連携、一貫した指導計画の元でより効果的な指導が望まれる。その際児童へのリタラシー指導は不可欠であり、初学者である児童に絵本等を活用して発達段階に応じた音韻認識から読みへの指導を行うことは大切である。英語学習導入時の小学生に「ORTのような leveled readers を大量に読み聞かせ（多聴）したり読ませたり（多読）して流暢さも育てるべきである。そうすれば中学で基礎力が固まり高校で英語運用能力も向上し、英語嫌いや苦手意識を持つ再履修大学生やリメディアル・クラスも減少し、結果的に大学生に必要とされる専門書も原書で読めるようになるであろう」（大槻・高瀬、2014, p.25）とあるように、そのような指導によって、これまで多くの実践者・研究者によって中学校から大学で徐々に実証されてきた多読指導による英語運用能力の向上を、より早い段階から進めていくことができると確信している。

また英語の指導法について教職課程で訓練を受けていない担任教諭が主導することが原則になっている小学校英語活動においては、優れた音声教材が付属した絵本を活用しての読みの指導は取組みやすい指導法のひとつでもある。

一方、本稿で紹介した1クラス6名までの小人数クラスで行っている音韻認識の指導法をそのまま30～40人のクラスサイズの小学校に持ち込むことは難しいこともあるため、児童英語教室での手法をどのように小学校の教室に援用していくか、今後実践の機会を得な

がら、更に探っていきたい。またどの学校種でも課題になっている「図書の確保」をどのようにしていくかということも、今後大きな課題となる。

なお本稿は、2014年3月1日に開催された JASTEC（日本児童英語学会）関西支部第6回活動研究大会での発表に基づいて執筆したものである。

参考文献

- 大槻きょうこ・高瀬敦子（2014）多読用図書教材としての L1 児童用英語絵本の人気の秘密：文科省英語教科書と比較して『日本多読学会紀要』7, 11-26.
- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学- 第二言語習得論とは何か』東京：岩波新書.
- 米国務省機関 外務職員局 FSI: Foreign Service Institute, Language Learning Difficulty for English.
- 宮清子（2011）『Superstar Songs 3（CD 付）英語のおとあそび教室』東京：mpi.
- リーパーすみ子（2011）『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』東京：径書房.
- Time 4 Learning <http://www.reading-skills-pyramid.org/phonemicawareness.htm>
- 学び支援の会 HP <http://www.manabishien-english.jp/④ld> と英語教育/4-3-音韻認識/
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/kanren/index.htm
- 文部科学省（2013）グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm